

HEARTful

笑顔と心をつなぐネットワーク

はーとふる

2020年
冬号

■新春対談

「奉仕、をとおして平和を築く」

田中 作次 × 砂川 敏文

2012-13年度国際ロータリー会長 特定非営利活動法人明るい社会づくり運動理事長

■特集

環境問題を考える 地球の未来を守るのは私たち！

〔環境問題を知ろう〕

山本 良一 東京大学名誉教授

| 連載 |

われら明社人 奈良県明るい社会づくり運動中和ブロック協議会
被災地レポート「AMDA(アムダ)の活動」



新年のごあいさつ



砂川 敏文

特定非営利活動法人明るい社会づくり運動理事長

昨年は、5月1日の新しい天皇陛下の即位に始まり、11月の大嘗祭まで、御代代わりの諸行事が滞りなく行われ、新しい令和の時代がスタートした年でした。また、日本で行われたラグビーワールドカップで、日本代表の「ブレイブ・ブロッサム」が「ONE TEAM」をモットーに激闘を展開して大活躍し、日本中を称賛と感動の嵐に巻き込んだことも記憶に新しいところです。

輝かしい令和2年の新年を迎え、令和の時代がその名にふさわしく、一人一人の日本人が美しく心を寄せ合い、明日への希望と共にそれぞれの花を大きく咲かせることができる、伸びやかで和やかな御代であってほしいと願うばかりです。

私たちの「明るい社会づくり運動」は、平成の最後4月27日に50周年記念大会を挙行し、令和の始まりと共に新しい歴史を刻み始めました。

大会のテーマは「伝統と革新」。過去50年の運動の経験の中で共有されてきた良き伝統と築き上げられた貴重な財産はしっかりと継承発展させ、苦い経験は大事な教訓としつつ、新しい時代の要請と社会

や人々の意識の変化に的確に対応する柔軟な革新性をもって運動を進めていく旨が宣言されました。もちろん、「利他の心をもって課題に取り組み、人々の善意の発現を促す。そうすることで明るく住み良い社会に近づけていく」とともに自らの人間性も向上させていく」という基本は変わりません。また、運動の進め方、取り組み手法については先に示された、心ある他団体、個人との協調や行政との協働などに関する「三つの方針」がこれからも効果を発揮するものと考えています。

今年は「東京オリンピック・パラリンピック競技大会」が開かれます。競技会場や各国選手団の合宿地は全国各地に散らばっています。各地がおもてなしの心を競い、国際交流が盛んに行われ、平和な世界の大切さが再確認されるのではないのでしょうか。そのためには全国どこも災害に見舞われることのない穏やかな年になることを祈っています。そして、何よりも明るい社会づくり運動にかかわる皆さまが、健康で明るく、そして仲良く活躍できますことをお祈りして年頭のごあいさつとします。

新年のごあいさつ

Contents

はーとふる2020年 冬号

【目次】

- 1……新春対談 “奉仕”をとおして平和を築く
- 6……特集 環境問題を考える ―地球の未来を守るのは私たち！
- 11……われら明社人
- 14……Palネット
- 16……被災地レポート
- 掲示板
- 耀!連隊 明社レンジャー



奉仕
平和を築く
をとおして

新春対談

田中 作次

2012-13年度国際ロータリー会長

砂川 敏文

特定非営利活動法人明るい社会づくり運動理事長

世界に122万人の会員が活動する2012-13年度国際ロータリー会長を務めていた田中作次さんと砂川敏文理事長が対談しました。

ロータリー活動と明るい社会づくり運動が目指すのは、共に、奉仕の心を育て、世界に平和を築くことです。

人生観を変えた活動

砂川 お目にかかれるのを楽しみにしております。よろしく願います。さっそくですが、田中さんの履歴を拝見しましたらご商売をされていたんですね。

田中 私は集団就職で上京して、小さな文具店で働くようになりました。その後、紙の卸^{おろし}を始め、ティッシュペーパーがアメリカから輸入されてきたときには、いちばんに取り引きを始め、「日本一、ティッシュペーパーを売ろう」と目標を決めたのです。おかげさまで年商100億円の大台に乗せるまで成長しました。しかし、紙の卸だけでは将来性がないので、私からお願いして、日用雑貨や化粧品雑貨などを扱う北海道と東北の会社と合併しました。先方は、当然、私が社長の座に就くと思ったようですが、私は社長にはならず役員として働きました。合併は将来性を考えてのことでした。協力し合って、社会に貢献できるいい会社をつくるのが目標でしたから……。

砂川 その目標は尊いことです。普通は、利益の追求はしても、社会貢献までは考えが及ばないですからね。

田中 会社にしても組織にしても、「自分のもの」という意識はないのです。私に与えられているものは、すべて他の人によってつくっていただいたと思っています。今いただいているものは、「仮」にお預かりしていると考えています。

砂川 「仮」に預かっているという発想なのですね。そうした考えは、いつごろからお持ちになったのでしょうか。

田中 私は新潟県の栃尾市、現在の長岡市で生まれ育ちました。食べるものもないほど貧しい家庭で、母は行商をしていました。朝の4時に起きて、リヤカーに荷物を載せ、谷あり山ありの片道20キロの道を4時間かけて長岡の街に向かいました。山で採れた笹の葉や新鮮な果物を売る母は、正直者でお客様からとても信頼されていました。街に着くと、常連のお客様がすぐ寄ってきて買ってくれたのです。

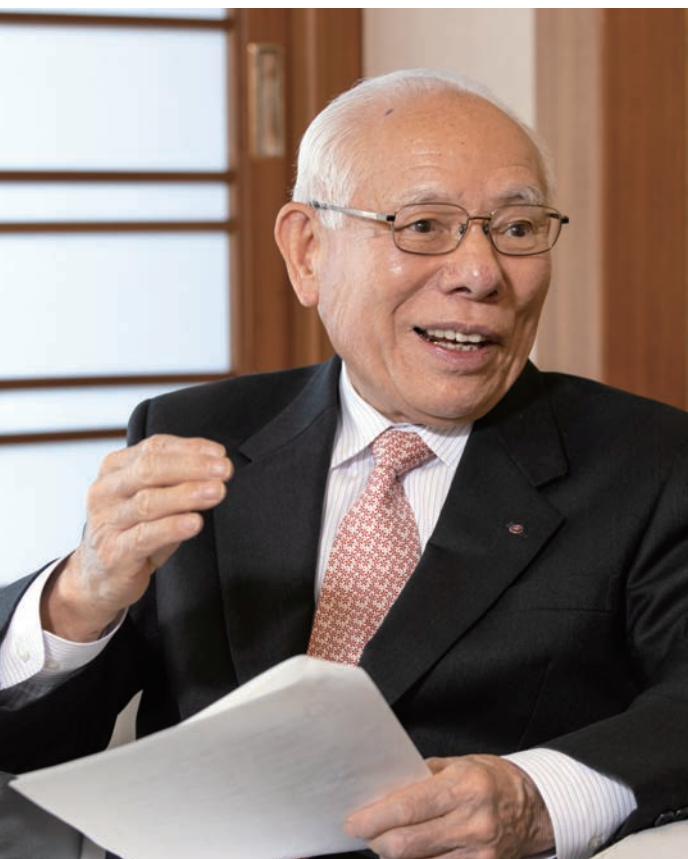
砂川 お母さまの姿を見ていらしたのですね。そうして信頼関係の結び方を学ばれてきたから、ご商売にも役立つことでしょう。信用は長い期間のかかわりのなかで抱いてもらえるものですが、ちょっとした不誠実なことをしたら、その場でくずれてしまいますからね。

田中 私にとって、母は神様のような存在です。母から多くのことを学びました。しかし、人生観が変わったのは、ロータリークラブに入ってからです。1975年に、埼玉県八潮市にロータリークラブを設立することになり、私はチャーター（創立）メンバーとして参加しました。その2年後、例会で職業奉仕について話を聞く機会がありました。その話を聞いてから、売り上げや収入を増やすことだけが、人生の目的ではないことに気づかされました。それが、他者を大切にすることだったのです。



砂川 生き方を変えられるロータリーの活動というのは、どのようなものなのでしょう。

田中 ロータリーは経済的なことを求める活動ではなく、感動や喜びを得られる活動です。もちろん、食べられないときに何が大切かといったら、食べるものを得ることですが、今の私は、衣食住をいただけています。ですから、これ以上、自分の欲望を満たすことよりも、人びとのニーズを優先する生き方を選ぶようにしました。人びとが抱える問題をわが問題として捉え、手助けをすること。それをロータリーでは、「超^{ちょう}我の奉仕」とい



田中作次 たなか さくじ

1939年、新潟県栃尾市(現・長岡市)に生まれる。1953年に集団就職で上京、働きながら夜間定時制高校へ通う。1970年から2年間、日本経済大学院で学ぶ。38年間、田中文具店で働き、その後、小さな店「株式会社タナカ」を全国トップの家庭紙卸売業に成長させた。1998年、株式会社タナカは、日用雑貨・化粧品卸売業のダイカ株式会社、富士商会株式会社と三社合併を実行し、ダイカ株式会社の会長に就任。1976年、八潮ロータリークラブのチャーターメンバーとして入会。2003-05年度国際ロータリー理事、2006-10年度ロータリー財団管理委員、2012-13年度国際ロータリー会長を歴任。

田中 私の場合、人に何かをしてあげることが喜びであり、生きがいになっていますから、こだわることになったのですよ。

砂川 ところで、ロータリークラブの会員をロータリアンといいます。世界の中みなさんは、初めて会っても旧知の友だちのように、すぐに心を通い合わせられるようにお見受けしました。というのも、私が暮らす帯広市は、アメリカのマディソン市(ウィスコンシン州)と姉妹都市になっています。調印式で訪ねた時に、その一行の中に帯広のロータリアンがいたのですが、すぐに現地の

っています。その生き方が、私の気持ちを豊かにし、幸せをもたらしてくれるものだと思っています。

砂川 私どもの明るい社会づくり運動は、小さなお子さんからお年寄りまで、自分たちの暮らす地域や社会をよくするために、自分ができることをやっていくという運動です。提唱者の願いは、さまざまな苦しみを抱えた人たちのために、「自分が役立つことはないか」とみんなを考え、奉仕をすることです。個人の願望実現だけではなく、みんなで一緒に取り組むところがいいと感じています。あらゆる人を拒絶しない、排除しない、それから強制もしない。こういう形で、日常的に継続していくことが大事なのではないかと……。

田中 あらゆる人が、地域や世界をよくするとい

う目標のために、力を合わせていく、つまり奉仕を通して平和を築いていくということです。

砂川 他者に関心をもつて、できれば社会のために何かしたいと思える人材を育てていきたいですね。さらには、活動に参画し、一緒に取り組んでもらえると思うっています。

田中 こんなことがありました。電車に乗ったら、私より年上の方が席を譲ってくれたのです。私は「どうしたものか」と考えましたが、「せっかく譲ってくれたのだ。その方の思いをくまらせていただく」と思い、すぐに「ありがとうございます」と言って座りました。私は次の駅で降りるのですから座らなくてもよかったのですが、その方の気持ちに無にするわけにはいかないでしょ？ 降りるときに、ていねいに「ありがとうございます」

といって、電車を見送りました。

砂川 それはいい話ですね。普通は、相手が自分より年を取っている人でしたら、「私は大丈夫です」と言ってしまう。田中さんは、相手の気持ちを優先されたわけですね。

田中 以前の私でしたらそう言っていたでしょう。でも、せっかく声をかけてくれたのに断ったら、その人に恥をかかせてしまいます。それどころか、断られた経験のある人は、次に声をなかなか掛けられなくなるんですよ。やはり、善意の心はきちんと受け取ってあげないと、次につながりません。

砂川 「いいことしたな」「親切ができた」という喜びが、次につながっていくのですね。「今度もまた、させてください」という気持ちを大事にしていきたいですね。そうした田中さんの考えや行動は、ロータリーのみなさんもお持ちなのですか。

田中 私の場合、人に何かをしてあげることが喜びであり、生きがいになっていますから、こだわることになったのですよ。

砂川 ところで、ロータリークラブの会員をロータリアンといいます。世界の中みなさんは、初めて会っても旧知の友だちのように、すぐに心を通い合わせられるようにお見受けしました。というのも、私が暮らす帯広市は、アメリカのマディソン市(ウィスコンシン州)と姉妹都市になっています。調印式で訪ねた時に、その一行の中に帯広のロータリアンがいたのですが、すぐに現地の



砂川敏文 すながわ としふみ

1948年生まれ。香川県出身。1970年帯広畜産大学畜産学部卒業。同年4月、農林省農地局入省。その後、北海道開発庁大臣秘書官、北海道開発局帯広開発建設部次長、北海道開発庁考査主幹等を歴任し、1997年北海道開発局官房調整官を最後に退官。1998年4月の帯広市長選挙に出馬し当選。以後連続3期市長を務め、2010年4月退任。市長時代から帯広明るい社会づくり運動推進協議会・顧問として明社運動に関わり、2011年7月1日より特定非営利活動法人明るい社会づくり運動理事長に就任。

ロータリアンと仲良くなってしまうのです。通じ合うものがあるのでしょうか。

田中 ロータリアンはきょうだいと同じです。家族みたいなものなのです。

砂川 同じ使命や目標をもっている仲間という安心感もあるのでしょうか。現在、ロータリーには何人の会員がいらっしゃるのですか。

田中 ロータリーは、1905年にアメリカのカゴで始まりました。現在、世界に3万5千のクラブがあり、122万の会員がそれぞれの地域社会のニーズに合わせて活動をしています。組織のあり方、めざすところなど基本的な決め事はあっても、それぞれの国や地域の実情に合わせてられる

よう、柔軟性をもたせています。世界から提出された提案や改善に関しての意見は、3年に1回、規定審議会というのがシカゴ本部で開かれ、そこで決定されます。緊急な課題に関しては、国際ロータリーの理事会で随時検討されるようになっていくんです。

砂川 地域社会のニーズに合わせて、役立つ活動をしていくことは大切なことです。明るい社会づくり運動では、国内500余りの組織が、地域の人びとと連携しながら活動を展開しています。実は、私が明るい社会づくり運動を初めて知ったのは、帯広市長の職にあるときでした。市内にはさまざまなボランティア組織がありましたが、明る

い社会づくり運動は、非常に柔らかな発想で活動をしていたのが印象的でしたね。気づいたら、私も一員となって清掃活動などに参加していました(笑)。

田中 30年くらい前、私たちの町が汚れているように感じましたので、友だちと二人で毎週2時間くらいの清掃を始めました。高速道路の高架下がゴミ捨て場になっていて、そこを二人で泥だらけになってせつせと清掃を続けていました。しばらくすると、県内の人たちが、「どうしてこんなにきれいになったのですか？」と尋ねてくるので、有志の方々と会議をもちました。それで、県内の多くの町で清掃を実施することになったのです。

いまも、月に1回、第2火曜日にロータリーのメンバーが集まって掃除をしています。やはり地域が基本だと思っているので、私も参加しています。**砂川** 自分の生活している所が住みやすく、和やかに暮らせるためには何をしたらよいのかを考え行動していく人が、日本国内あるいは世界の各地にふえていくといいですね。

田中 自分たちの足元の行動が、少しずつ広がっていくことで世界の平和につながるのだ、という気持ちで取り組んでいくことです。小さなことを大切に、大きく転換していくのです。

国際活動の取り組み

砂川 田中さんは、国際ロータリーの会長もお務めになられていたので、国際的な活動にも目を向

けてこれたのでしょうか。

田中 日本人としては3人目の会長を2012年から2013年に務めました。私の前任者から37年間、日本人の会長は選出されていませんでした。在任中はシカゴに滞在し、各国を訪問しました。現在、国際ロータリーはポリオ（小児麻痺）の撲滅に絞って積極的な支援をしています。1988年からずっと継続しています。

砂川 ロータリーのように、世界中に会員がいる大きな組織だと効果がありますね。ポリオ撲滅を達成できたら、歴史的にも天然痘に続いて大きな成果を上げることになるのではないですか。

田中 そのほかには、貧しい子どもたちのために教育の場や水と衛生設備を提供しています。さらに、教師や助産師の研修の支援も行っています。数年前からは、地球温暖化対策として植樹活動をしていますね。すべて各地域のロータリアンが協力して取り組んでいます。

砂川 アフリカでは、お産のときの感染症で子どもや母親が亡くなるケースが多いと聞かれています。清潔な飲み水がないことが原因なのですね。

田中 そこでロータリーでは井戸を掘るための補助金を出しています。その井戸もかな



り深く掘らないといい水が出ないのでしょ。

砂川 私どもは、日本国際ボランティアセンター（JVC）が進めている「ラオスに井戸を贈る運動」を支援しています。これは、書き損じハガキを換金し、井戸を設置する費用に当てるというものです。毎年、何基かの井戸を設置することができています。ラオスの人びとに役立てられているというのは、私たちの喜びにもなっています。

田中 他者への奉仕をすると、こちらが幸せを感じるのですよ。ロータリーの活動に「平和フェロー・プログラム」があります。有能な平和構築者の希望が実現できるよう、奨学金を支援しています。私個人の「冠名世界平和Fellowship基金」というのも設立されています。

勉強をしたい人が、奨学金を基に一生懸命に学び、それを平和のために使ってくれます。それで十分です。

自らがチャレンジする精神

砂川 支援も大事ですが、私たちは活動をとおしてさまざまな方たちと出会い、いろいろなことを学んでいるのだと思います。その学んだ力を、こんどはどう広げていくか……。強い意志で目標に向か

って進んでいくと、「やれるはずだ」という手ごたえを感じますね。

田中 まずは、目標を定めてみることです。年齢は関係ありません。「もう年だから」と言ったらもったいない。趣味でもなんでもいいのです。私は健康のためにゴルフをしています。今年はシングルになろうという目標をもちました。そのためにスクールに入ることにしたのです。目標を達成することで、違った世界が広がると思っています。砂川さんは山登りをされているそうですが、富士山を「努力」して登る」とは言いませぬよね。登り切ったときの達成感や周りの景色に感動するから何度でも山登りにチャレンジするのではないのでしょうか。

砂川 登り方は人それぞれです。ものすごいスピードで登る人もいれば、ゆっくりゆっくり踏みしめながら登る人もいます。明るい社会づくり運動も、地区によってさまざまな歩みをしています。が、地道に取り組むことで、昨年は提唱50周年を迎えることができました。

田中 あらゆる人を拒絶しない、排除しない、それから強制もしない。それぞれがもっている職種や能力を出し合いながら、日常的に人に役立つことを地道に継続していくことが、世界の平和につながるかと私は信じています

砂川 田中さんのお話を伺って、明るい社会づくり運動をますます前向きに推進していきたいという気持ちになりました。今日は、本当にありがとうございました

環境問題を考える

——地球の未来を守るのは私たち！

「いま、地球の環境はどうなっているのだろうか」

「自然や資源の破壊は、どれくらい進んでいるのか……」

「私たちの未来はどうなるの？」

あなたは、このような疑問をおもちではありませんか。

地球温暖化、エネルギー問題、ごみ問題などが深刻化するなか、世界の気候変動によって豪雨災害が頻発しています。その災害を回避するためには何が必要なのか、どうやって環境対策を進めていけばよいのでしょうか。環境問題は、国際社会において遠く離れた土地の事ではなく、遠い先の問題の話ではありません。そこで本年は、環境問題をみなさんと一緒に考えてみたいと思います。



環境問題とは

人間が活動することによって、地域の環境に変化が生じて起こるさまざまな問題のこと。地球温暖化、ごみ問題、大気汚染、生物多様性の喪失などがあります。それぞれの問題は無関係ではない。たとえば、牛肉を消費するためには草木をエサとし、輸送のために化石燃料を使うことで、それが温暖化の原因となっています。さまざまな物資が簡単に手にはいるようになった日本では、使い捨てや食べ残しが当たり前になり、ごみを増やす原因の一つとなっています。このように環境問題は複雑につながりあっています。

環境問題 キーワード

最近、環境問題に関する言葉を目にしたり、聞いたりする機会が増えてきました。何が、どのような問題をひき起こすのか、まずは基本的な用語を知っておくことも大切です！

地球温暖化

温室のビニールシートとおなじような役割をする温室効果ガス、主に二酸化炭素（ CO_2 ）が増え、地球の気温が上がり、海面の上昇や気候の変化などさまざまな問題を引き起こしています。

温室効果ガス

大気圏にあって、地表から放射された赤外線の一部を吸収することにより、温室効果をもたらす気体のことです。水蒸気や二酸化炭素などが温室効果ガスに該当します。この他、メタン、一酸化二窒素、フロンなども温室効果ガスに該当します。近年、大気中の濃度を増しているものもあり、地球温暖化の主な原因とされています。

大気汚染

自動車の排気ガスや工場などの排煙などで空気が汚れ、人間の健康に影響を与えます。

ごみ問題

ごみを燃やすと二酸化炭素（ CO_2 ）やダイオキシンが発生し、地球の環境や人間の健康に影響を与えます。また、土に埋めたごみから有害物質が流れ出し、土や川などの汚染につながることもあります。

マイクロプラスチックごみ問題

環境中に存在する微小なプラスチック粒子で、特に海洋環境において極めて大きな問題になっています。一部の海洋研究者は1mmよりも小さい顕微鏡サイズの全てのプラスチック粒子と定義しています。現場での採取に一般に使用されるニューストーンネットのメッシュサイズが333 μm (0.333mm)であることを認識していながらも、5mmより小さい粒子と定義している研究者もいます。海洋生物がマイクロプラスチック自体と、それに付着した有害物質（PCBやDDTなど）を摂取し、生物濃縮によって海鳥や人間の健康にも影響することが懸念されています。現在は、科学的な検証・検討は途上で、日本を含めた世界の官民で発生量抑制や回収を目指す取り組みが始まっています。

生物多様性

動植物、微生物、菌類などの生物の種類が多く、生物がすめるさまざまな環境がたくさんある状態のことです。私たち人間の生活は、食料、薬、木材をはじめとした生物の恵に支えられているため、「生物多様性の喪失」は大きな問題といえます。

環境問題を知ろう

高まる気候危機

—— 私たちに残された時間

目の前にある危機

21世紀に入って、気候危機と同時に環境危機が目の前に現れてしまいました。人類文明に不可欠な環境と気候が非常事態にあります。

サンゴ礁が半分くらい絶滅したこととか、環境危機、気候危機という問題に直面しています。私たちの身近なところでも、昨年の台風15号、19号によってたいへんな災害が起き、多くの方たちが被害に遭われて何人もの方たちが命を落とされました。

こうした状況は、人類文明にとって気候と環境が健全であるとはいえないのです。非常緊急事態であるわけです。私たちはいま、その問題をどのように解決していくかということが重要なときです。そのためにも環境がどのような状態なのかをしっかりと認識し、危機を回避するた

東京大学名誉教授

山本 良一



Profile

やまもと りょういち 1946年(昭和21年)、茨城県水戸市に生まれる。東京大学工学部冶金学科にて工学を学ぶ。その後、東京大学大学院に進み、工学系研究科にて博士課程を修了。1988年から東京大学先端科学技術センター教授。1992年に東京大学生産技術研究所教授。2001年、東京大学国際・産学共同研究センターのセンター長に就任。専門は材料科学、持続可能製品開発論、エコデザイン学。エコマテリアル・フォーラム名誉会長、環境経営学会会長、環境プランニング学会会長、日本LCA学会会長、LCA日本フォーラム会長、環境効率フォーラム会長、国際グリーン購入ネットワーク会長、エコプロダクツ展示会実行委員長、北京大学、清華大学など中国の33の客員教授を歴任している。

めの社会的な行動をとるということです。

社会全体が総力あげて世界的な同意によって乗り越えようとして、2018年8月にスエーデンの当時15歳の少女、グレタ・トゥーベリさんが一人で気候ストライキを始めたのです。それが引き金になって、いま全世界で意識を高めてきて、2019年9月20日には、世界各国で400万人ともいわれる若者がデモ行進や学校ストライキなどを起こし、地球温暖化対策を訴えたのです。

昨年はそうした運動が全世界に爆発的に広まった年でした。3月15日に全世界で一斉ストライキが行われ150万人が参加しました。5月20日は180万人、9月20日は400万人で、その後の一週間で760万人が参加したのです。11月29日には、第4回目の世界一斉ストライキが行われ、そのときは日本においても2,000人が参加しています。さらに、12月

には、「国連機構変動枠組み条約第25回締約国会議(COP25)」がスペインで開催され、そこでグレタさんだけではなく、多くの青少年や女性が立ち上がっています。「未来がなくなってしまう」と、高校生、中学生、小学生までもが叫びをあげました。なぜ、それほどの人たちが声をあげるのか。それは危機が目にあるからです。

「私の未来をつぶさないで」

1992年にリオで開催された「地球サミット」で、当時12歳のセヴァン・カリススズキさんが5分間、スピーチしました。「伝説のスピーチ」といわれるほど素晴らしい内容でした。そのころはまだ、環境危機、気候危機というのが、それほど明確ではありませんでしたから、セヴァンさんは、「もう少し環境問題に力を入

れて取り組んでほしい」という要請、あるいは懇願のような内容だったのです。

しかし、27年後の昨年、国連総会に合わせて開催された温暖化対策サミットで行ったグレタさんの演説は、まさに涙と怒りのスピーチでした。それが世界を震撼させました。つまり、われわれ大人を糾弾しているのだと思います。「自分たちはストライキなんかしたくない。学校に戻りたい。しかし、学校で勉強していても、あと10年後の地球はどうなってしまうのか、どうなるのか……。自分たちの未来は無くなってしまう」という、怒りと涙の糾弾なのです。

セヴァンさんのスピーチから27年たった地球は、本当に変わってきてしまいました。

27年間、何をしてきたのでしょうか。問題の解決をしてこなかったということなのでしょう。大いに反省するところだと思っております。

地球はいま

これまでの環境問題、気候変動問題に対する対応と決定的に違いが出てきているのは、「世界の破局が始まっているのではないか」という考えが強くなってきているところです。

世界の平均気温がいま、急激に上がってきています。世界の平均気温が上昇してティッピングポイント（転換ポイント）を超えると、環境が激変します。元には戻れない事象が起きると考えられているのです。

サンゴ礁は全滅してしまいます。北極の海水は、夏のシーズンは融解してしまい、グリーンランドの氷床はティッピングポイント2℃を超えると、融解したら融解したままになるといいます。

それだけではありません。西南極大陸氷床のノンストップの崩壊、アマゾンの熱帯雨林が枯れてサバンナになってしまうとか、10年くらい前は、世界の平均気温が産業革命から5℃くらい上がらないと、このような恐ろしい現象は起きないだろうと。しかも、起こったとしても、21世紀の末ころではないかと予想されていたのです。

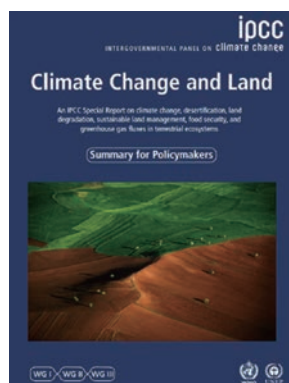
2015年のパリ協定^{*1}で気候変動の問題を決するというのは、2℃以下にすれば、ティッピングポイントを超えないと考えられていました。できれば1.5℃以下に抑えたい。なぜなら海面水位が上がると水位の低い太平洋の島は沈没してしまうと考えられていたのです。ところが、状況は変わりました。それは、「気候変動に関する政府間パネル（IPCC）」が出した3つの報告書によります。

2018年10月、2019年8月、9月とIPCCが特別報告書を出しました。とくに2018年10月のIPCC特別報告書『1.5℃の地球温暖化』¹が出されて、5℃ではなく、1.5℃か2℃上がってしまうと、ティッピングポイントを超えるのではないかとということ、みんな「これはたいへんだ」と考え

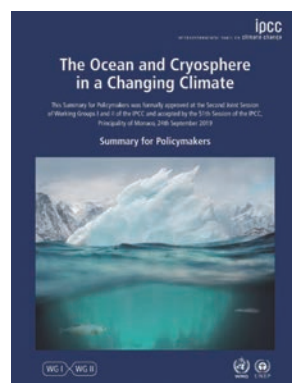
IPCCの3つの特別報告書「環境と気候が非常事態」にあることの科学的根拠



2018年10月



2019年8月



2019年9月

だしたのです。それで、2018年10月以降、世界の平均気温を1.5℃以上上げてはいけないという意見が強くなってきました。驚くことに、若者たちが「IPCCの『1.5℃特別報告書』を参考に政策とか企業経営をしていかな」といけない」と言い出したのです。

このまま何もしなければ、いちばん早くて

*1 パリ協定（気候変動）第21回気候変動枠組条約締約国会議（COP21）が開催されたパリにて、2015年12月12日に採択された、気候変動抑制に関する多国間の国際的な協定（合意）。

2030年には、1.5℃を突破するということが予想されるからです。

「2050年ゼロ」に向かって

1.5℃以下に抑制するためにはどうしたらよいのかというと、2030年までに2010年水準のCO₂の排出量を45%制限し、2050年には実質上、ゼロにすることなのです。^{※2}

『ネイチャー』の11月28日号に有名な研究者による論文が発表されていきました。それには、「人類はもう戻ることができないところにきてしまった可能性がある」という見解を発表しています。その理由は、あと10年か20年でティッピングポイントを超えてしまうことなのです。

私たちの環境においては、すでにいろんな現象が起きています。いろいろな現象といわれる9つのティッピングポイントがあるのです。

1. アマゾンの熱帯雨林で高頻度の干ばつの発生
 2. 北極海道の海水の縮小
 3. 大西洋海洋の減速
 4. 北方林における火災と害虫の変化
 5. サンゴ礁の大規模な死滅
 6. グリーンランド氷床の加速度的な減少
 7. 永久凍土の融解
 8. 西南極大陸氷床の加速度的な減少
 9. 東南極のウィルクス氷床盆地の加速度的減少
- 以上の項目ですが、つまりアマゾンの熱帯雨林で高頻度な干ばつが発生していてサバンナに

なる可能性があるとか、北極海の夏の海水面積が30年で半分に減少したか、大西洋の海洋循環が15%減速しているとか、その北方林、森林火災が頻発しているとかです。また、サンゴ礁の大規模な死滅が起きているとか、グリーンランド氷床が加速的に減少している、永久凍土融解が、東南極大陸のウィルクス氷河の減少の加速などの現象が始まっています。これらを食い止めるには、温室効果ガスを少なくともゼロにするか、できれば空気中の温室効果ガスを除去する必要があります。つまり温室効果ガスの放出量と吸収量を同じにすることなのです。正味ゼロカーボンにする必要があります。ですからいま、国際社会は「2050年二酸化炭素排出実質ゼロ」へ向かっています。

昨年11月6日に153か国、11、258名の科学者が署名して、「現在の世界の気候は非常事態にある」という宣言文を出しました。私も署名しています。科学者のなかでは「気候や環境が非常事態にある」ということが科学的に明確であるということなのです。

2050年まであと30年あります。しかし、ティッピングポイントを超えるのが10年か20年といわれています。しかし、われわれ人類が社会経済の大転換を図るのに30年くらいかかるだろうといわれているのです。間に合うのか、間に合わないのか……。科学者のなかには「間に合わない」という人もいます。もう時間との闘いといってもよいでしょう。だから、いまわ

れわれがやらなければならないのは、地球気候システムのティッピングポイントを超える前に、社会経済の大転換をしていくことなのです。

2020年はポイントオブノーリターン

2050年にゼロにするには、早い時期から減少させることでゆっくり減少させることができます。遅れば遅れるほど危機状態は迫ってきます。2020年を過ぎると、実質上、1.5℃以下とか1.2℃以下に世界の平均気温上昇を抑制することが不可能になると専門家は考えているんです。毎年の温室効果ガス排出量の削減率が高くなり過ぎて実行不能となってしまうためです。

2020年は人類文明の運命を決める年になるといいかもしれません。非常に重要な年になると思います。「環境革命の年」になるといっても過言ではありません。ポイントオブノーリターンです。引き返すことのできなくなる地点の境目なのです。この環境と気候の非常事態を宣言し、社会的動員によって危機を乗り越えようという運動も始まっています。

私たちは、温室効果ガスの排出量を抑制するために循環経済を構築し、環境や地域社会へ配慮するエシカル消費^{※3}の生活に切り替える必要があります。気候変動の危機を回避できるかどうかは、私たちが徹底的に取り組むかどうかにかかっているのです。

※3「エシカル」(ethical)とは、「倫理的な」という意味を持つ形容詞で、多くの人が考える「社会的な模範」のこと。特に最近では、環境保全や地域・社会への考慮といったニュアンスで捉えられることが多い概念。それを実践できる身近な行動の1つが「エシカル消費」という。

※2「気候変動対応修正法案(ゼロカーボン法案)」とは、2050年までに温室効果ガスの排出量を実質ゼロとする枠組み。